思いや意図をもって音楽表現をする力を育む小学校音楽科歌唱授業の在り方
―「音の絵図」を用いた活動を通して―

令和６年度大分県教育センター長期派遣研修員　別府市立上人小学校　藤岡　美樹

要旨

本研究では，思いや意図をもつための手立てとして，線や図，色彩や言葉等を用いて表出する活動を行うことにより，自己の考えが明確になり言語化に繋がると捉え，実践的手法を用いて検証した。音楽から聴き取ったことや感じ取ったことを，曲線や記号等を用いて楽譜上に書き込んだものを「音の絵図」とし，これらを手立てに児童が思いや意図をもったり，考えを言語化したりすることを促した。検証の結果，「考えをもつこと」「考えを伝えること」を促すには，「音の絵図」を用いることが概ね有効であることが明らかになった。

〈キーワード〉小学校音楽科／思考，判断し，表現する一連の過程／線や図，色彩や言葉等の多媒体／歌唱共通教材《もみじ》／音の重なり

Ⅰ．研究の背景と目的

１．背景

(1) 現状

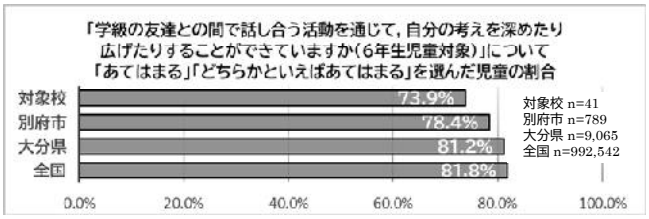
『小学校学習指導要領解説（H29 告示）音楽編』では，改訂の趣旨及び要点として「思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること」等に重点を置いてその充実を図ってきたことが示され，今後も思考力，判断力，表現力等の育成が引き続き求められている。

国立教育政策研究所(2024)は，『小学校学習指導要領実施状況調査の分析結果（速報版）』において，小学校音楽科の課題として，思考力，判断力，表現力等の育成について挙げている。特に，「音楽を聴いたり楽譜を見たりして，音楽表現の工夫についての根拠を考え言葉で表す問題」の通過率は 46.3%であり，数値の低さから改善の必要性が指摘された。

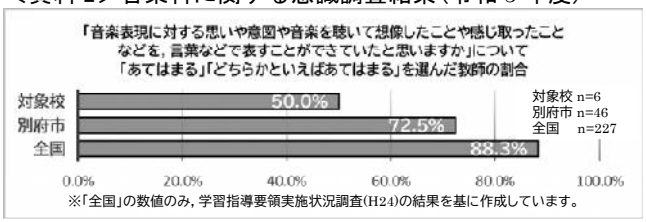
これらの課題は，地域の実情とも重なる。別府市は，「個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実した『主体的・対話的で深い学び』の実践に向けた授業改善の推進」のための一つの指標として，「話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり広げたりすることができる児童生徒」を育成することを掲げ，思考力，判断力，表現力等の育成に視点を置いた授業改善に取り組んでいる（資料 1）。

別府市内の小学校教師を対象に行った独自調査（資料 2）においては，「音楽表現に対する思いや意図や，音楽を聴いて想像したことや感じ取ったことなどを言葉などで表すことができていたと思いますか」という設問について，調査結果の肯定率（「どちらかといえばそう思う」「そう思う」を選択した教師の割合）は 72.5%（「そう思う」に絞ると 5.0%）であり，自信をもって指導に当たっている教師は少数であることが推察される。また，別府市立 A 小学校の児童には，国立教育政策研究所が行った『平成 24 年度学習指導要領実施状況調査結果』から質問内容を抽出し，調査を行った。その中で，「感じたことや考えたことを，発表したり話し合ったりできましたか」という設問の調査結果から，児童には「考えをもつこと」，「考えを伝えること」，これら 2 つの課題があることが明らかになった。そこで本研究では，児童が学習の過程でどのように考えをもち，考えを伝えるのかに着目し，その上で，思いや意図をもって音楽表現をするための手立てはどのようなものであればよいか検証することで，授業改善を推進していくための手掛かりが得られるのではないかと考える。

＜資料 1＞学習に関する意識調査結果（令和５年度）



＜資料 2＞音楽科に関する意識調査結果（令和５年度）



(2) 課題

小学校音楽科における課題は，音楽表現の工夫についての根拠を曲全体の構造と関わらせて考え，言葉で適切に表すことである。また，思考，判断し，表現する一連の過程においては，「考えをもつこと」「考えを伝えること」の 2 つに課題があると考える。

(3) 先行研究

①言語や言語以外（多媒体）を用いる必要性について

文部科学省(2003)は，音楽科の教育内容の改善・充実について，思考力・判断力・表現力等を高めるため，言語を用いた言語活動を行うほか，言語以外の方法（音や形，色など）を用いた言語活動や，音や形，色などにより表現されたことを捉えて言語化する言語活動の充実を求めている。

山村(2017)は，身体的表現は音楽の理解を深める有効な手段であることを述べている。また，中島(2012)，宮下(2012)は，音楽を「絵」「情景」「文章」等に移し換えることについて，それ自体が創造的であり楽曲の構造や表現内容を導き出すとしている。これまで多く研究されてきた身体的表現が，「体感的な認知プロセス」であるとするとき，「視覚的な認知プロセス」についての報告は少ない。桑原ら(2005)は，多媒体を音(聴覚)，身体(筋感覚)(触覚)，形・光・色(視覚)，言葉(視覚)(聴覚)と整理し，その有効性を検証した。その結果，多媒体が音楽のイメージを具体化するのに有効であるとされた一方で，身体以外の多媒体と音楽の関係を明らかにするには至っていないとしている。

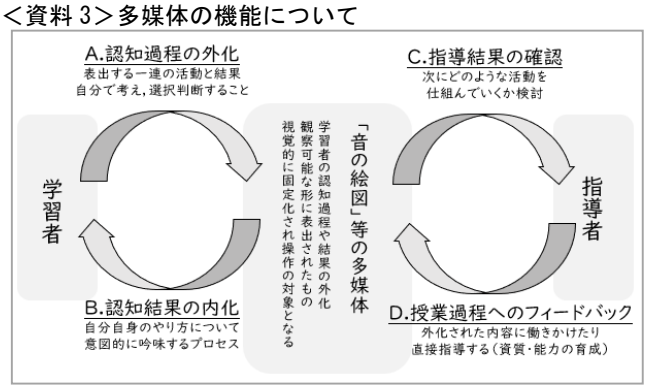
②認知過程における多媒体の位置づけについて

堀(2009)は，学習の過程を外部に表すことを「外化(externalization)」としている。学習者が認知過程を外化(資料 3 中の A)するとき，それが具体的かつ可視的に観察可能な形で表出されると，指導者は学習者の学習状況を確認しやすく，その後の働きかけの手掛かりを得ることができる(資料 3 中の C)。また，外界に認知結果や過程が固定化されることで記憶が保持されると同時に，それ自体を操作の対象とすることができるので，情報処理の負担が軽減できる。自らの認知活動の中途結果を確認するために外化(資料 3 中の A)を行うが，それによって認知活動の再吟味や他者との共有，新たな視点の獲得等のメリットが生まれやすくなる。

また，堀は，外にあるものを自分自身の認知過程の中に取り入れることを「内化(internalization)」としている。認知過程の外化は，自分自身の認知過程を具体的に観察可能な形にするという点において，内省(自分自身の考え方ややり方について意図的に吟味するプロセス)及び内化の促進に極めて重要な役割を果たす。内省および内化は，自己の認知過程の吟味，調節，修正，再編成等を含んでいるので，自分の思考についての思考であるメタ認知の育成に大きく関連しているとされている。

本研究ではこの点に着目し，音楽について感じたことや考えたことを外化・内化する際のツールとして，歌唱分野においては「音の絵図」を用いることとする。

＜資料 3＞多媒体の機能について



２．目的と手立て

(1)目的

本研究の目的は，小学校音楽科の授業において，思考，判断し，表現する一連の過程を，「考えをもつこと」「考えを伝えること」という点から分析し，思いや意図をもって音楽表現をする力を育む授業の在り方について考察することである。

(2)手立て

本研究における歌唱授業では，多媒体として新たに「音の絵図」を用いることとする。本研究において用いる「音の絵図」とは，『思考，判断し，表現する一連の過程において，音楽から感じたことや考えたことについて線や図，色彩や言葉等を用いて楽譜上に表出されるもの』とする。本研究では，感じたことや考えたことを表出したり伝えたりする活動において，「音の絵図」を用いることが，効果的な手立てになるのではないかと考える。

Ⅱ．仮説

小学校音楽科歌唱授業において，感じたことや考えたことを「音の絵図」を用いて表出したり伝えたりすれば，思いや意図をもって音楽表現をすることに繋がるであろう。

Ⅲ．研究の内容と方法

１．小学校音楽科授業づくりについての考え方

(1)「思いや意図をもつ」ことについて

『学習指導要領解説(H29 告示)音楽編』によると，中学年の歌唱分野において，「どのように歌うかについて思いや意図をもつとは，曲の特徴を捉えた表現を工夫する過程において，このように歌いたいという考えをもつことである」とされている。また，発達段階に応じて表現の工夫について考えを深めることができるように，段階的に示されている。

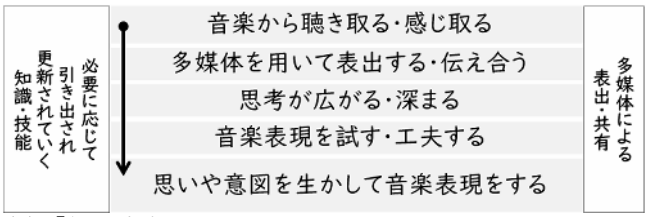
＜資料 4＞学習指導要領解説音楽編の表記(抜粋)

	低学年	中学年	高学年
表現の工夫とは	曲想を感じ取って表現を工夫しとは，その音楽に固有の雰囲気や表情，味わいを感じ取り，それを基に表現をつくりだすことである。	曲の特徴を捉えた表現を工夫しとは，歌唱表現を工夫する手掛かりを曲の特徴に求めて表現をつくりだすことである。	曲の特徴にふさわしい表現を工夫しとは，歌唱表現を工夫する根拠を曲の特徴に求めて表現をつくりだすことである。
思いや意図をもつとは	このように歌いたいという考えをもつことである。	曲の特徴を捉えた表現を工夫する過程において，このように歌いたいという考えをもつことである。	曲の特徴にふさわしい表現を工夫する過程において，このように歌いたいという考えをもつことである。
児童の傾向	歌うことが好きで，模倣して歌ったり歌詞の表す情景や場面を想像して歌ったりする。	曲の特徴を意識して聴こうとしたり，感じ取ったことや想像したことを伝え合い，それを生かして歌おうとしたりする意欲をもつようになってくる。	曲の特徴を理解して聴こうとしたり，自分の思いや意図が聴き手に伝わるような表現をしたりしようとする意欲が高まってくる。
思いや意図の例	「楽しくお話をしている感じが伝わるように歌いたい」	「２羽の鳥が呼びかけ合いながら遠ざかっていく感じが伝わるように，強く，やや弱く，やや強く，弱く歌おう」	「盛り上がるところは響きのある歌声で歌いたい。そのためには，3段目の最後のフレーズをだんだん強くして４段目の曲の山につなげよう」

先述したとおり，国立教育政策研究所(2024)の調査結果では，思いや意図をもつことについて小学校第 6 学年の通過率が著しく低かった。この現状を解決するには，小学校中学年の学びの経験が重要になる。幼稚園や小学校低学年で直感的・体感的に学んできた素地を基にしながら，中学年では他者と思いを伝え合いながら思考を深め，表現方法を試行錯誤し，表現が高まっていく喜びや音楽の美しさを体感する等，より学びを充実させる重要な時期であるといえる。この経験が，小学校高学年や中学校音楽科の一層の充実に深く影響を与えると考え，検証授業の対象を小学校中学年とした。

本研究における授業づくりの基本的な考え方では，以下のようなプロセスを想定している。それぞれの項目に順序や段階はなく，個別に思考が進む場合もあれば，全体での学びにおいて教師が適宜焦点化したり学習を振り返る機会を設けたりすることで，質が高まっていく場合もあると考える。

＜資料 5＞思いや意図をもつプロセス



(2)「伝え合う」ことについて

『小学校学習指導要領解説(H29 告示)音楽編』では，思いや意図をもつ過程において「伝え合う」ことが重視されている。このことは，思考力，判断力，表現力等の育成に向けた言語活動の充実に繋がるものであると捉える。各教科においては「話し合うこと」「発表すること」「議論すること」等と表記されるが，音楽科においては「伝え合うこと」という表記に一貫され，その位置付けについても教科固有のものとなっている。音楽科において「伝え合うこと」とは，①音や音楽，言語や言語以外を用いること，②音楽表現を高めるために行われること，③言語活動と音楽活動の往還を図ることが重要であるとされており，本研究では以上の 3 点に留意した上で検証授業を行う。

２．児童の意識実態調査の概要について

児童の実態を把握するため，実態調査を実施した。(資料 6)

＜資料 6＞児童の意識実態調査の概要

対象	別府市立Ａ小学校 第4学年 46名	
期日	令和6年6月21日(金)	令和6年10月8日(火) 令和6年10月9日(水)
調査内容	音楽科授業に関する児童の実態調査	検証授業後の児童の実態調査

３．検証授業の概要について

(1)概要

検証授業は筆者自身が授業者となり実施した。概要は次のとおりである。(資料 7)

＜資料 7＞検証授業の概要

対象	別府市立Ａ小学校 第４学年 46 名
期日	令和６年９月～令和６年 10 月
目的	児童が多媒体を用いて感じたことや考えたことを表出したり伝えたりする活動を通して思考，判断し，表現する一連の過程を，「考えをもつこと」「考えを伝えること」という点から分析し，思いや意図をもって音楽表現をする力を育む授業の在り方について検証する。
検証方法	発言，行動，演奏，記述，聞き取り調査等
指導内容	〔共通事項〕音の重なり(強弱，音色)
教材	・《もみじ》 高野辰之 作詞/岡野貞一 作曲/中野義見 編曲 ・《アルルの女第2組曲》より〈Ⅳ.ファランドール〉 G.ビゼー 作曲/E.ギロー 編曲

(2)検証方法

授業分析にあたっては，授業中の児童の発言や行動，児童の記述や「音の絵図」，授業後の聞き取り，検証授業前後に実施した児童の実態調査(質問紙)の結果を基に分析を行う。

(3)検証授業の流れについて

検証授業の流れは次のとおりである。(資料 8)この題材では，鑑賞と歌唱の活動を通して，「音の重なり」の面白さに気付き，「音の重なり」を活かした表現の工夫について考えることをねらいとしている。児童たちにとっては，二部合唱に取り組むという活動が学習のゴールとなる。その際に，鑑賞《ファランドール》と歌唱《もみじ》に共通する「音の重なり」(旋律が交互に掛け合ったり，重なったりする音楽の構造)に児童が自ら気付き表現に生かすことができるように，題材構想し授業を実施した。

＜資料 8＞検証授業における学習の流れ

時	主な学習活動		共通事項
Ⅰ	2つの旋律の特徴を感じ取りながら聴こう 《ファランドール》の2つの旋律「王の行進」「馬のダンス」を聴き，2つの旋律の特徴について気付いたことを共有する。	鑑賞	音の重なり 音色 強弱
Ⅱ	2つの旋律の掛け合いや重なりを感じ取りながら聴こう 《ファランドール》の2つの旋律が掛け合ったり(1～6 場面)重なったり(7 場面)することに気付き，曲想が変化していく面白さを共有し，曲全体を味わって聴く。		
Ⅲ	音楽の特徴を感じ取りながら歌おう 《もみじ》を繰り返し聴いたり歌ったりしながら，曲想及びその変化と，旋律や音の重なりなどの音楽の構造との関わりについて気付いたことを伝え合ったり歌って確かめたりする。	歌唱	
Ⅳ	旋律の重なりを生かした歌い方を工夫しよう 《もみじ》を繰り返し聴いたり歌ったりしながら，曲の特徴を捉えた表現の工夫について考え，「音の絵図」を用いて伝えることにより，言語化することを通して，自分なりの思いや意図をもつ。		
Ⅴ	旋律が重なり合うよさを生かして歌おう 思いや意図にあった表現をするために，互いの歌声や副次的旋律，伴奏を聴いて声を合わせて歌うことを試し，聴き合って気付いたことを伝え合い，よりよい表現を目指して音楽表現をする。		

Ⅳ．結果と分析

１．児童の意識実態調査の結果から

(1)検証授業前後の実態調査結果

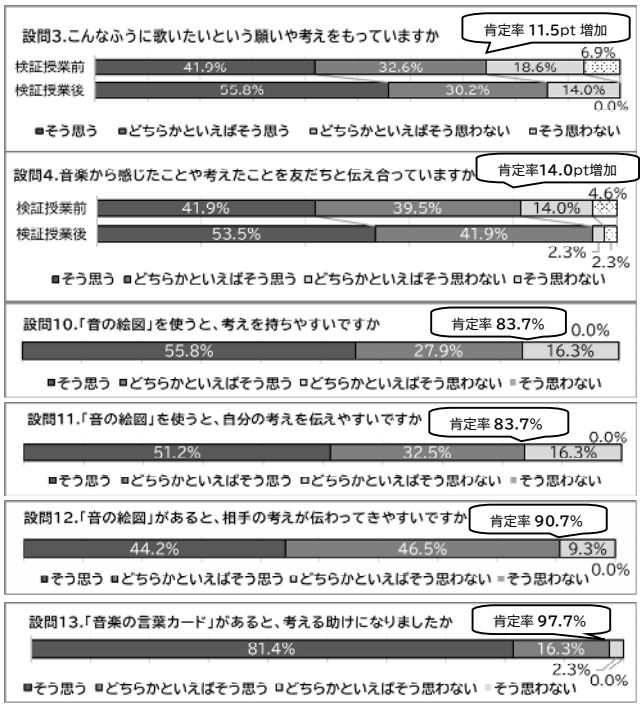
検証授業前と検証授業後の意識実態調査を次頁に示す。結果から，「考えをもつこと」の肯定率は 11.5%増加

し，「考えを伝えること」の肯定率は 14.0%増加した。このことから，集団全体の傾向として肯定的な変容があったことが明らかになった。

また，「『音の絵図』を使うと，考えをもちやすいか(設問 10)」および，「『音の絵図』を使うと，自分の考えを伝えやすいか(設問 11)」についての肯定率はどちらも 83.7%であった。「『音の絵図』があると相手の考えが伝わってきやすいか(設問 12)」についての肯定率は 90.7%であった。このことから，「音の絵図」を用いることが，「考えをもつこと」「考えを伝えること」を促すことに一定の効果があったといえる。

さらに，「『音楽の言葉カード』があると，考える助けになったか(設問 13)」についての肯定率は 97.7%であった。考える視点が明確になることで，思考が働きやすいことが推察される。

＜資料 9＞児童の意識実態調査結果



＜資料 10＞「音楽の言葉カード」掲示物の一部

(2) 実態調査結果を基にした分析

児童の意識調査結果を基に，設問 3 と設問 4 の結果を分析し，児童を 4 つの群に分類して検証授業前後の変容を考察する。

具体的には，「そう思う」「どちらかというとそう思う」を選択した児童を肯定群，「どちらかというとそう思わない」「そう思わない」を選択した児童を否定群とし，次のように児童を A～D 群に分類した(資料 11-1)。

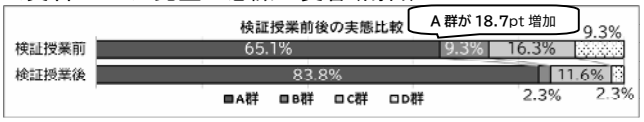
＜資料 11-1＞児童の意識の変容(人数)

(検証授業前→検証授業後)

	伝え合っている	伝え合っていない
考えをもっている	A群 28名→36名	B群 4名→1名
考えをもっていない	C群 7名→5名	D群 4名→1名

検証授業の前後を比較すると，B 群，C 群，及び D 群であった児童にも概ね良好な変容が見られた。

＜資料 11-2＞児童の意識の変容(割合)



2．検証授業から

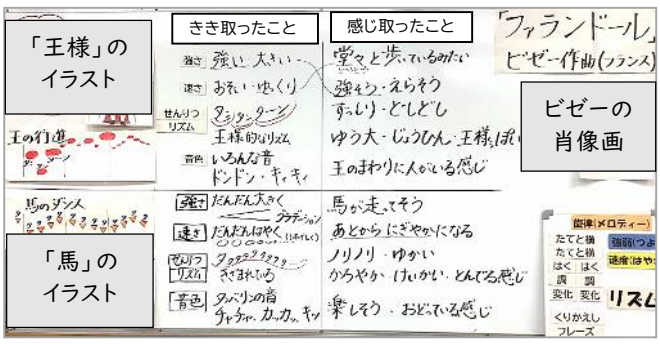
(1) 検証授業Ⅰ～Ⅱ(鑑賞)について

検証授業Ⅰでは，「2 つの旋律の特徴を感じ取りながら聴くこと」をめあてに位置付け，授業を行った。2 つの旋律を対比して聴く活動を行い，「聴き取ったこと」や「感じ取ったこと」をペアや全体で共有した。その際に，「音楽の言葉カード」で「強さ」「速さ」等，要素ごとに整理しながら，児童たちの考えを板書した。

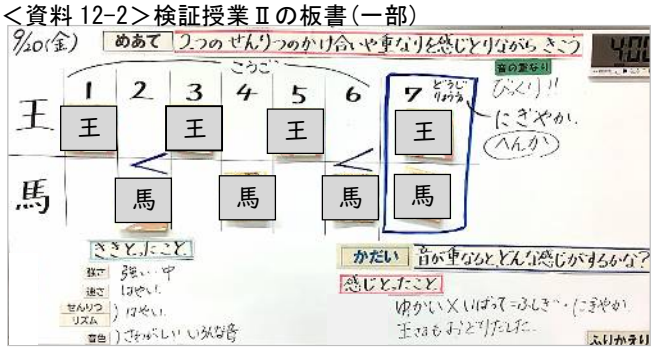
《ファランドール》に出てくる 2 つの旋律には「王の行進」と「馬のダンス」というタイトルが付いていることを教師が伝え，それぞれがどちらであるか発問した。改めて鑑賞すると，体を動かしながら音楽を聴く姿も見られた。その後，改めてペアや全体で「聴き取ったこと」と「感じ取ったこと」を共有した。児童たちが身体的表現を行ったり，音楽について「聴き取ったこと」と「感じ取ったこと」を他者に伝えたりすることにより，考えがより明確になっていく姿が見られた。

検証授業Ⅱでは，「2 つの旋律の掛け合いや重なりを感じ取りながら聴くこと」をめあてに位置付け，楽曲全体を味わう活動を設定した。児童たちが音の重なりに着目したところで，7 の場面(音が重なる部分)について，タブレット端末を用いて個別に聴き，「聴き取ったこと」と「感じ取ったこと」をペアや全体で共有した。授業の最後に《ファランドール》の演奏を映像で鑑賞すると，音が重なる面白さを視覚的に捉え，楽器の音色や奏法，指揮の動きと関連付けて考えている姿が見られた。

＜資料 12-1＞検証授業Ⅰの板書(一部)



＜資料 12-2＞検証授業Ⅱの板書（一部）



＜資料 12-3＞音の重なりに着目している記述（抜粋）注)

・聴くとウキウキしてくるから，馬のほうが好き。音が重なり合うだけで，違う音楽みたいで面白かった。
・最後の 7 場面が好きだった。いろんな楽器が聴こえる。いろいろな楽器が合わさってすごかった。
・ファランドールは，1～6場面の行進している感じとダンスを踊っている感じが交代に流れているけど，7 場面は2つの感じが合わさって，力強い，激しい迫力のある感じになった。
・2つの旋律が交互になっていて，リズムに乗るような感じがした。最後に2つが合わさって，ダンスしている感じがした。馬は小さな音から大きな音になっていって，好きだった。2つの歌が交互でダンスしている感じがした。最後の2つが組み合わさったのが好きだった。

(2) 検証授業Ⅲ～Ⅴ（歌唱）について

歌唱共通教材《もみじ》は，児童が初めて出会う二部合唱の歌唱教材である。1～2 フレーズ目のカノン，3 フレーズ目の 3 度の重なり，4 フレーズ目の副次的旋律等，音楽的特徴に気付き，楽しみながら二部合唱を経験し，表現について思いや意図をもつことができるように活動を行った。

検証授業Ⅲでは，《もみじ》を知っている児童の割合は 7 割程度であったが，まずは全員で斉唱した。別府市の秋の景色について話題にすると，児童たちは自分たちの経験を引き出しながら秋について語り，秋の出来事を想起している様子が見られた。秋のイメージを想像しながら改めて楽曲を歌わせ，歌詞から色彩を感じた部分に色を塗る活動を行った。児童たちは，言葉一つ一つの意味に意識を向け，歌詞の表す情景をより正確に掴もうとペアで言葉の意味を確認しようとする姿が見られた。具体的には，「夕日」「楓や蔦」「裾模様」等が話題になった。作詞の高野辰之が峠から見た紅葉の美しさに惹かれて作詞したことを伝えたり，山の裾野に広がる鮮やかな景色について伝えたりすることにより，想像を広げている様子が見られた。

＜資料 13-1＞児童が描いた色彩イメージ

＜資料 13-2＞検証授業Ⅲの板書（一部）

歌詞に色を塗ったもの（資料 13-1）をペアや全体で共有し，作者が感動した一面の鮮やかな紅葉をイメージしながら遠くの山へ「ヤッホー」と呼びかけるという発声を行うと，児童の声色が響く歌声に変容した。その後，改めて楽曲を歌い，この楽曲から感じとったことや，この曲の好きな所についてペアで共有すると，児童たちは，「優しい感じ，美しい感じが伝わるように歌いたい」という思いをもつことができた。このような活動を通して，児童たちは，曲想及びその変化と，歌詞の内容とのかかわりについて気付くことができた。

その後，1～2 フレーズ目のカノンの部分を斉唱する児童たちの歌声に，教師が下のパートを歌って重ねると，音楽の特徴に気付き，「追いかけっこになっている」「リズムや音程に気をつけて，下のパートを歌えるようになりたい」と意欲を高め，挑戦しようとする姿が見られた。

検証授業Ⅳでは，下パートの旋律に慣れ親しみ，重ねて歌うことを楽しんだところで，楽譜を観察し，音楽の特徴的な部分や難しい部分を共有した。児童が発表する際には，児童の思いを共有するために，教師が楽譜上に印や曲線で児童の考えを位置付けるようにした（教師による「音の絵図」）。その後，タブレット端末を用いて個人で楽曲を聴いたり口ずさんだりしながら，気付いたことや感じ取ったことを楽譜に描き込み，ペアで伝え合い全員で歌唱する活動を行なった（児童による「音の絵図」）。このような音楽活動と言語活動を繰り返す中で，「音の絵図」に描いたことを基にしながら，文章で記述し始める様子が見られた。

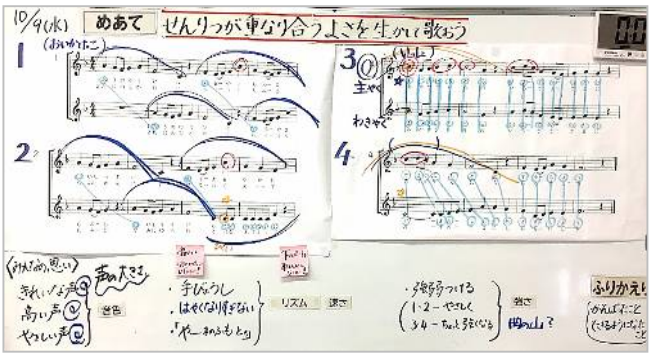
このように，児童たちは曲想及びその変化と，音の重なり等の音楽の構造や歌詞との関わりについて気付き始めた。その後，「音の絵図」を用いて表出し試行錯誤しながら，曲の特徴を捉えた表現を考え，どのように歌うかについて思いや意図をもつことができた。

検証授業Ⅴでは，「秋のきれいな感じ，優しい感じ，流れる感じを表現するために，①きれいな声で②リズムや音程を正確に③強弱を工夫して歌いたい」「音の重なりを生かした強弱にしたい」等と考えている姿が見られた。児童が思いや意図に合った表現ができるようになりたいと思うようになった段階で，教師が働きかけると，児童たちは必要感をもって技能を身に付けようとしていた。この学びのサイクルが，思いや意図をもって音楽表現をする児童の姿といえるのではないかと考える。

＜資料 13-3＞児童の振り返りの記述より（検証授業Ⅳ）注)

・優しく，高く歌いたい。ひっぱられるような感じで歌う。きれいな声で歌えるようになりたいです。
・声は小さくして強さは「数あるなかに」の所以外は弱くする。ゆっくりと静かに歌う。重なっている所といない所を見分ける。
・もう少し，強弱や声の高さに気を付けて，歌えると思うので次から気を付けて歌うようにしたいです。
・「山のふもとの」の伸ばすのが難しかったから，タイミングを合わせるように歌いたいです。
・高音や低音を変えたり，強弱を付けたりして歌うようにしたいです。
・声をもう少し上げる，みんなで息を揃える。オペラと似たような声で歌いたいです。

＜資料 13-4＞検証授業Ⅴの板書（一部）



＜資料 13-5＞児童の振り返りの記述より（検証授業Ⅴ）注)

・いつもは高い声があんまり出せなかったけど，高い声を出してみると，自分でもいい声だなと思いました。
・一番初めよりすごく優しい声やきれいな声で歌えました。今まで歌ってきた中で，一番よくできたのではないかと思いました。最後なのは，少しまだ歌いたいと思ったので，家でいっぱい練習してもっと上手くなりたいと思いました。
・高い声を出すことができるようになった。とても難しかったけど，みんなで合唱してとてもみんな声が高かったし，きれいで，とても良かったです。
・1年生の頃からずっと音楽が苦手だったけど，みんなの歌声を聴いて，音楽っていいなって思いました。

(3) 抽出児の変容について

検証授業後に行った抽出児への聞き取りや，授業中の児童の発言や行動，記述や「音の絵図」等を基に，「考えをもつこと」「考えを伝えること」の視点で分析し，「音の絵図」の機能について整理する。

なお，本研究においては，児童の実態を踏まえ，伝え合う姿を目指しつつ，「考えを伝えること」に着目して検証する。

①D 群から A 群へ変容した児童の場合

歌詞に色を塗る活動や楽譜に線を描く活動を通して，ペアの友達にワークシートを見せる中で，表情が明るくなっていく姿が見られた。

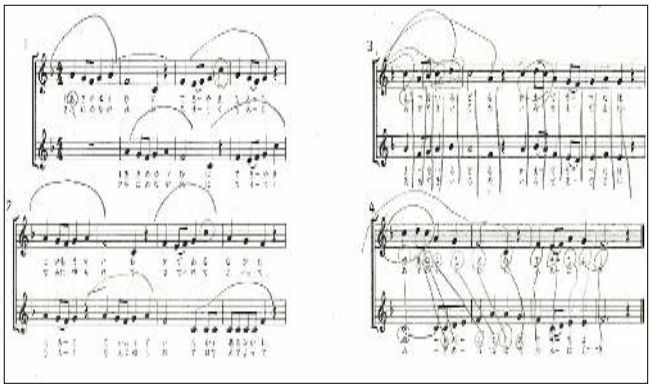
この曲が生まれた背景について教師が伝えると，色彩のイメージを一層広げ，楽曲への愛着を感じるようになったそうである。また，旋律の重なりに着目し，高さや強弱について「このように歌いたい」という表現の工夫について考える様子が記述から見られ，「声を調節して曲に合ういい声で歌いたい」という思いをもち続けて取り組んでいた。

事後の聞き取り調査では，「景色を想像しながら歌うのが好きになった」という発言があった。音楽から感じ取ったことを色や線で描くこと，描いたものを他者と見合うこと，作詞者の思いを知ることにより思考が進み，自己の考えが明確になっていくことで言語化に繋がったと推察する。

＜資料 14-1＞児童の記述（D 群→A 群）注)

	記述・口頭（・……考えをもつこと・……伝えること）
検証授業Ⅲ (もみじ①)	・リズムや声の調節をして，曲に合う声で歌いたい。 ・歌うのが難しかった。
検証授業Ⅳ (もみじ②)	・つられないように，上の人は少し強く，下の人は少し弱く，リズムを意識して歌いたい。 ・上の人は声を高く大きく，下の人は声を低く小さく一緒に歌う。
検証授業Ⅴ (もみじ③)	・景色を想像しながら歌うとつられなくなった。 ・みんなで歌うと楽しかった。
事後 聞き取り調査	・初めは自信がなかったけど，歌詞に色を塗りながら想像して，友だちと見せ合って話せた。 ・もみじの歌が好きになって，楽譜に線を描いたら，こんなふうに歌いたいという考えが浮かんできて，言葉でも書けた。 ・歌うときも，様子を想像しながら歌うことができた。みんなで歌えて嬉しかった。楽譜に描き込んでなかったら文で書けなかったし，考えが浮かばなかったと思う。

＜資料 14-2＞児童が描いた「音の絵図」（D 群→A 群）



②C 群から A 群へ変容した児童の場合

鑑賞の学習では，常に体を動かしながら真剣に聴いていた。「王のリズムを見つけるのを工夫した。馬のリズムは見つけることがすぐできた。」という記述が見られたことから，身体的活動を伴いながら思考する傾向のある児童であると捉えた。

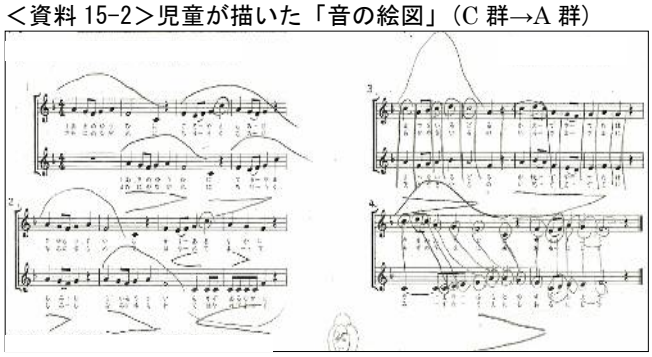
歌唱で曲の山を探す際には，歌いながら手の動作で確認し，曲の山について考えていた。また，強弱記号（＜＞）を用いて楽譜に描き込む様子が見られた。楽譜を見つめ，旋律の動きを確認しながら，強弱を「音の絵図」で表出し描いたり消したりして考える姿が見られた。「音の絵図」に描き込まれた強弱記号は，この児童が実感を伴って得た知識を自ら引き出し，活用したものであると考える。そしてそれは，「音の絵図」を用いたことにより，引き出されたともいえる。また，この児童は音楽から感じ取ったことや考えたことを身体で表す活動を積極的に行っていた。旋律の動きやエネルギーを身体の動きで表出することが，楽譜上に「音の絵図」で視覚化され，その後の音楽表現につながっていったと推察する。

＜資料 15-1＞児童の記述（C 群→A 群）注)

	記述・口頭（・……考えをもつこと・……伝えること）
検証授業Ⅲ (もみじ①)	・音楽が苦手だったが上手になった。追いかけっこの

	所を，もっと上手く歌えるようになりたい。
検証授業Ⅳ (もみじ②)	・追いかけっこの所は，鬼から逃げるみたいに，キャッチボールするみたいに歌う。 ・強弱を付ける。曲の山を意識する。 ・「やーまの」の所のリズムに気を付けて歌う。 ・「数ある中に」の所が速くならないようにする。
検証授業Ⅴ (もみじ③)	・高い音の所が歌えなかったけど，歌えるようになった。つられずに歌えた。
事後 聞き取り調査	・自分の考えを強弱の印で描けたから，嬉しかった。 ・最後に楽譜を見て，頑張って良かったと思った。

＜資料 15-2＞児童が描いた「音の絵図」（C 群→A 群）



③B 群から A 群へ変容した児童の場合

授業中に板書や「音楽の言葉カード」をじっくりと見つめて静かに考える姿が多く見られた。音楽の言葉を使いながら，自分なりに考えを丁寧に記述することができる児童であり，視覚的に物事を捉えたり，文章で記述したりすることが得意な児童であると捉えた。

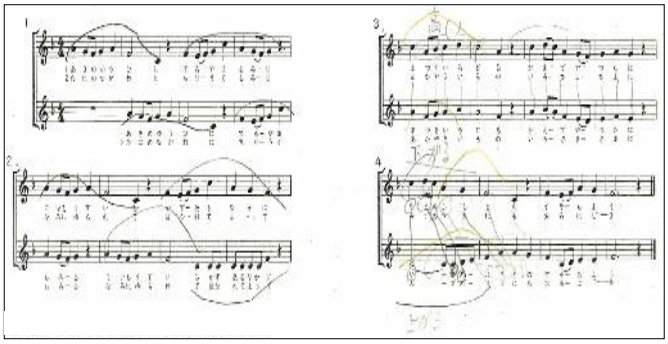
《もみじ》の 4 段目の音の重なりに着目し，はじめは「ここを歌うのが難しい」と気付いている様子であった。楽譜を基に音楽を観察すると，次第に音楽の構造に気付き，「旋律が上がっていくのと，下がっていくのが重なっている」「リズムも違う」「ここが合うように歌う」という意識が高まっていっている記述が見られた。

考えたことを他者に伝える際には，ペアの場だけでなく，全体の場でも板書や「音の絵図」等の視覚的なものを手掛かりにしながら発表することができた。事後の聞き取り調査では，「描くことができたから，自信がついて伝えやすかった」と話していた。この児童にとって，視覚的に情報を整理することが，安心して学ぶことに繋がったと考える。

＜資料 16-1＞児童の記述(B 群→A 群) 注)

	記述・口頭(・……考えをもつこと・……伝えること)
検証授業Ⅲ (もみじ①)	・紅葉が落ちていく感じ。優しい感じがする曲。 ・繰り返しの速いリズムの所が難しかった。
検証授業Ⅳ (もみじ②)	・重なる所では歌い出しの旋律が聴こえるように，もう一方のパートが強さに気をつけて歌う。 ・合唱するとつられそうになるけど，みんなで相手を聴きながら合わせて歌うのがいいと思う。 ・音楽を聴いて工夫を見つけることができた。
検証授業Ⅴ (もみじ③)	・4段目は，上のパートは下がって，下のパートは上がっている。ここが合うように歌いたい。 ・4段目の所を合わせるのを頑張った。 ・リズムや音を合わせるのが難しかった。
事後 聞き取り調査	・自分の考えをワークシートに描くことができたので，ペアの人に伝えやすくなった。言葉じゃなくても，描くことができたから自信がついて伝えやすくなった。

＜資料 16-2＞児童が描いた「音の絵図」（B 群→A 群）



④A 群の児童の場合

他者と対話をする中での言葉数は少ないが，他者との会話の中で何か思い付くと自分の世界に入って思考し，夢中になって描き込む様子が見られた。この児童のワークシートには，自問自答を繰り返している様子があった。

「音の絵図」を描く際には，強弱記号（＜＞）の他，自分なりの記号（◎○△）を用いて強弱を表す記述が見られた。◎は「強く」，○は「弱く」，△は「普通」という意味で用いている。考えを深めるうちに，「強い」「弱い」だけでは表せないと考えたようであった。

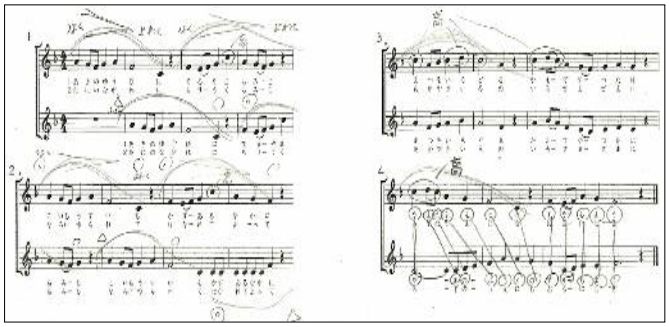
また，「音の絵図」の内容から，上下の 2 つの旋律の強弱のバランスについて，関連させながら考えを深めている様子が読みとれる。2 つの旋律が浮かんでは消えていくカノンの味わいを感じ取っていることが推察される。そして，この児童が楽曲から感じ取ったこと「紅葉が落ちて，流れていく感じ」を表現するために，強弱を用いて表現を工夫しようとしていることが読み取れる。この児童が 2 つの旋律を意味のあるまとまりとして捉え，さらに価値を見出しているということであると捉える。

学習指導要領において，「知識とは，（中略）児童一人一人が，体を動かす活動などを含むような学習過程において，音楽に対する感性を働かせて感じ取り，理解したものであり，個々の感じ方や考え方等に応じて習得されたり，新たな学習過程を通して更新されたりしていくものである」と明示されている。この児童の姿は正に，知識を活用し，更新しようとしている姿であると考える。

＜資料 17-1＞児童の記述(A 群→A 群) 注)

	記述・口頭(・……考えをもつこと・……伝えること)
検証授業Ⅲ (もみじ①)	・日本らしくて，紅葉が落ちて，流れていく感じ。 ・速さはゆっくり，強弱は弱い。 ・歌っていて気持ちよくなった。紅葉が落ちてきているみたいな曲だと思った。
検証授業Ⅳ (もみじ②)	・「強く」「弱く」を決めて歌うといい？ ・同じ所を歌う人で円になって歌うといい？ ・どこを強くどこを弱く歌えばいいか迷った。先生や友だちの話を聞いたり話したりして考えた。
検証授業Ⅴ (もみじ③)	・最初，自信がなくて声が小さかったけど，最後はみんなで大きい声で歌えて嬉しかった。
事後 聞き取り調査	・「強く」「弱く」を考えるときに，「普通」の強さも必要だと思った。自分で印を決めて楽譜に描いてみて，そのとおりに歌うことができて嬉しかった。

＜資料 17-2＞児童が描いた「音の絵図」(A 群→A 群)



以上のことから，「音の絵図」には，①曲線や言葉，強弱記号で思いのままに描き込むことが可能であったこと，②「音の絵図」を見合うことにより相手に考えを伝えやすかったこと，③自己や他者の「音の絵図」を視覚的に捉えることで考えが整理され文字による記述に繋がったこと，④楽譜に描き込むことで音楽表現の工夫につながるということの 4 つの機能があり，それぞれの児童の学びを支える手立てになったと考える。

Ⅴ．考察

１．「音の絵図」にみる児童の思考プロセスについて

音楽について気付いたことや考えたことを「音の絵図」等を用いて表出し，音楽のイメージを視覚的に共有することにより，「考えをもつこと」「考えを伝えること」を支えられることが，検証授業の結果から明らかになった。そして，「音の絵図」で表出したことを手掛かりにしながら音楽表現を工夫しようとする姿に繋がった。

その際には，①正確に演奏しようとする段階，②演奏の工夫を創造しようとする段階が見られた。①の段階では，困りを感じる部分で立ち止まり，音楽を視覚的・聴覚的に観察することを通して音楽的特徴(リズムや音の高さに特徴がある部分)に気付き，音楽活動に生かそうとする姿が見られた。②の段階では，音楽のイメージに合う表現の工夫を模索する姿が見られた。

２．知識及び技能との関連について

検証授業後の実態調査結果から，「音楽の要素〔共通事項〕」が考える助けになったと実感する児童の割合が高いことがわかった。「音の絵図」を用いることにより，「音楽の要素〔共通事項〕」の直感的な操作が容易になり，思いや意図を手軽に表出しやすくなったと考える。また，思いや意図を音楽表現に生かすために，必要感をもって技能を習得しようとする姿に繋がったため，学びの自覚化を生みやすくなったと考える。

留意点としては，児童たちは個々の経験や感覚を基に音楽的な見方・考え方を働かせるため，表出される言葉は個別多様であり他者との共感に繋ぎにくい点である。このようなときに，教師が児童たちの個々の気付きを「音楽の要素〔共通事項〕」をベースに整理し，「音の絵図」で可視化することで，児童たちが自己と他者の考えを関連付けながら捉えることができると考える。

Ⅵ．研究のまとめ

１．成果

音楽科授業において「考えをもつこと」「考えを伝えること」を促すには，「音の絵図」を用いることが概ね有効であることが明らかになった。

また，児童の思考プロセスについて，2 つの段階(①正確に演奏しようとする段階，②演奏の工夫を創造しようとする段階)とそれに伴う思考の深まりが見られた。これらを経るためには，「音の絵図」を用いる等の環境づくりを行うことにより，思いや意図をもって音楽表現をする姿に繋がるということが明らかになった。

２．課題

今回の検証授業では，児童の実態を踏まえて「考えを伝えること」に視点をおいて実践したため，「伝え合うこと」の検証には至らなかった。今後は，音楽科においても「伝え合うことにより考えを深めたり広げたりする」児童の育成に視点を置き，授業改善を図ることが求められると考える。

また，「音の絵図」がどのような児童，どのような題材において有効であるかについては検証できなかった。この点については今後の課題とし，児童に「考えをもつこと」「考えを伝えること」を促すための手立てや授業の在り方については，引き続き実践を重ねていきたい。

＜参考文献＞

文部科学省(2003)『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』中教審第 197 号

国立教育政策研究所(2003)「音楽のカリキュラムの改善に関する研究―諸外国の動向―」『教科等の構成と開発に関する調査研究』研究報告書(15)

桑原章寧他(2005)「Ⅲ多媒体による総合的な表現(プロジェクト J)」『学校音楽教育研究』第 9 巻，日本学校音楽教育実践学会

堀哲夫(2009)「認知過程の外化と内化を生かしたメタ認知の育成に関する研究 その 1―OPPA による外化と内化のスパイラル化の理論を中心にして―」『山梨大学教育人間科学部紀要』第 11 巻

中島卓郎(2012)「ドイツベルリン州のカリキュラムと授業実践」『音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較 日本, カナダ, 韓国, アメリカ, ドイツ, イギリスをめぐって』日本学校音楽教育実践学会編

宮下俊也(2012)「5 国の検討から得たカリキュラムと授業改善への指針と課題(4)ドイツベルリン州」『音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較 日本, カナダ, 韓国, アメリカ, ドイツ, イギリスをめぐって』日本学校音楽教育実践学会編

文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説音楽編』, p.6

山村結(2017)「音楽教育における身体的表現活動の実践的な指導のあり方と分析方法―ドイツ・オスナブリュック大学音楽学部での講義内容を通して―」『教育デザイン研究』第 8 号，横浜国立大学，pp. 149-156

小原光一他(2024)『小学生の音楽 4』教科書, 教師用指導書研究編，教育芸術社

国立教育政策研究所(2024)『令和 4 年度小学校学習指導要領結果について(音楽)【速報版】』令和 6 年 7 月 10 日今後の教育課程, 学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会(第 13 回)提出資料(資料 2-2)pp. 17-21

＜注＞

注)児童の記述から引用したもののうち，誤字脱字，平仮名で表記されたものについては，適宜修正および漢字変換して示している。

＜付記＞

本誌に掲載している音楽作品や楽譜については，著作権法に基づき使用した上で，著作権者である教育芸術社に掲載の許諾を得て掲載している。なお，楽譜作成の際には，楽譜作成ソフト「MuseScore」を使用した(https://musescore.org/ja)。また，倫理的観点に基づき，児童の個人情報に配慮した上で情報を適正に管理し使用している。